



Good Job
All about
Japanese Leather



アイデアをデザインに反映させる。
木下さんの最も好きな時間だ

革の世界は、発見にあふれていた。元々ものづくりが好きだった木下由有さんは、アクセサリー作りに携わった後、3年前に革ベルトメーカーの土方産業にデザイナーとして入社した。「まず驚いたのが、革の素材としての可能性でした。厚みや下地が違うだけで全体の印象がガラッと変わるから選択肢が広い。そして、職人さんの魔法のような技術。頭にあるイメージをすぐに形にしてくれるんです」

もちろん、失敗もあった。自分が思い描いていた形とは違う商品ができたり、縫製が異なったりと苦い思い出は数知れない。そこで木下さんはコミュニケーションの大切さを痛感した

と言う。「失敗のほとんどは、自分の意図を職人さんに伝え切れていないことが原因。伝えたい思い込まずに、何度も工房へ足を運んで職人さんと打ち合わせをすることを、第一に心がけるようになりました」

職人と顔を付き合わせて意見

謙虚に、だけど貪欲に。

—— 土方産業 木下由有さん

交換することで、ミスが少なくなるだけでなく、職人の豊富な経験から貴重な助言を得られる。「毎日が勉強です」と話す木下さんの姿勢は謙虚そのものだ。だが、土方産業社長の武内さんは彼女の別の面を証言する。「彼女は欲張り。僕らがある程度満足したのもでも、まだ足りない」と改良を試みる。でも、その探究心はクリエイターには絶対必要なことなんだよ」

確かに、木下さんが手がけた製品を拝見すると、気がつかないような細部にまで至る工夫が目を見く。こうしたアイデアはどこから生まれるのか。

「本物の職人と商品に囲まれているおかげで、ずいぶん目が鍛えられました。その目で自分の商品を見ると、もっとこんなことができるという思いが次々に出てきちゃって。結局、いままでに満足した商品はほんのわずかです」

謙虚さと貪欲さ。この両輪で、木下さんはものづくりの世界をひたむきに走り続ける。

